

- ◎早いものでもう 12 月、誕生日の 15 日がもうすぐ、76 歳になる。オレ自身はもう少し生き延びたいと希望しているが、オレの全身の細胞が滅亡に急いでいるのか、年々一年が短くなってきているような気がする。
- ◎今日はスマホに対するぼやきを少々・・・。
- ◎安威川河川敷に来ております。「ああ これは葦だね」12 月に入って間もない今、葦の穂先、これは花なのか実なのか知らないが、穂先全部が綿毛になってきている。これは、昔の大名行列、先頭の奴が、「下へえ 下へ」なんてうなりながら槍の穂先に綿毛をつけて練回していた。子供のころの時代劇映画で奴のそんな姿を見たのを思い出す。何を振り回していたのかな、時代考証で調べないと、ま、今度でいいかな。この葦たち、葉もほとんど枯れ、ほっこほこの穂先の綿毛が同じ方向に傾いて向こうが見えないぐらい林立している。安威川河川敷の中州には、ここは葦だけど、ススキもある、よく似た葉っぱで、小豆色の小さい実を穂先につけたものもある。スマホに“レンズ”というソフトがあり、パチリ写すと、植物の名前を教えてくれる。以前通信不可のスマホを山に持参していたが、通信不可ではこのソフトも不可だった。
- ◎寒いね、薄いジャンパーを 2 枚重ね着して走っている。何日か前から足を宙に浮かせる訓練をしている。「よく歩きますね」なんて言われて、「ちゃうちゃう 走ってるつもりなんですけど・・・」なんて言い訳するつもりもないが、と笑っている。この 2.3 年は、一步一步、歩くように走っていたのだが、ほんの少し足が宙に浮く快感が懐かしく嬉しいほてり。毛糸の帽子に手袋、これだけ着込んでも汗が出ない、身体の老化なのか、しかたがないよね。
- ◎実はこの録音、いつもの IC レコーダーではなく、スマホでやっている。上手く録音できるか、録音したデータを取り出し聞けるか、試してみようとスマホに語りかけている。まず結論からいうと大失敗だった。録音した音声を聞こうと思ったが聞けないパソコンに送ろうにも送れない、メールで添付しようにも載らない。なぜかという、録音停止のボタンを押していなかったので 5 時間もの録音時間になっている、100 メガを超える重量級のファイルになってしまっている、そらあ、あかんわね。もっとも、2.3 日前に採録したものは、素直に取り出せ、素直に聞いた。
- ◎スマホをもって、一か月を超えたのかな、いまだに電話がかかってきて、「ええと どこのボタンだ・・・」なんて戸惑っているうちに電話が切れてしまうなんてことがまだまだ続く。メールやラインも、文字を打つのが遅く、いい歳のジジババ連が道の真ん中でスマホをにらめつつ長い時間かけて操作をしている姿をよく見かける。「ええい みっともない」そう思っていた自分が今の姿だと、思慮深く考えると思い当たるとい痛ましい突っ立ちなのかな。写真にしろ音声にしろ書類にしろ、google に保存できることがわかった。また一つ進化した。走っている最中に、山仲間のラインがピコピコ、安威川の写真を撮りそれを添付して返信もできた。
- ◎20 年以上前、「旅先で 画像と文章を 公開できたら どんなに 素晴らしいだろう」と夢想していた。そんな夢想が今は簡単に解決できている。もっとも、スマホのこれは、美しくない、満足できない・・・。
- ◎スマホ初心者のおレにとって、山での GPS 機能を使った地図は画期的だ。LINE 仕様の送信や会話も魅力的だ。ただ込み入った話になると、電話の方が話が通じやすいかな。
- ◎先日来気になっていることがある。オレは文章や画像をパソコンできれいに作っている。それを送ると、頓珍漢な返信が帰ってくる。「詳しく読めよ 画像を見ろよ」と心の中で思っていた。皆さんとメールのやり取りをしていて、「この方 かつては しっかりしていた方なのに てにおはが おかしい 主語が抜けてる 日にちが間違えている 少しボケが出始めているのか」なんて思っていたが、スマホの小さい画面では 難しい話はなかなかスムーズに進まない、話せない、書けないということがわかった。オレが、これだけ丁寧に資料を作っているのに、「読めない人 だったのか」なんて思っていたが、スマホの小さい画面で、丁寧に資料は読み下せないことがわかった。スマホに不慣れなジジババは、簡単操作だけする、複雑操作や作業はパソコンに頼る、今はこれだねえ。そのてん、若い連中はこのあたりのことを、さっさと解決している、パソコン同様に使いこなしているんだろうね。

## 三浦祐之著&lt;口語訳：古事記&gt;

◎オホサザキの大君が亡くなって、オホサザキの御子たちが次々と三代にわたって天の下を治めたもうた。

三代にわたって同母の兄弟が続けて即位することは今までにないことだった。それだけ跡継ぎの争いが激しかったということであり、今までの天皇たちのような父子による直系相続ではないという点で真実味があるやも。

◎イザホワケ（17代履中）の大君は父オホサザキと同じく難波に坐したのじゃ。そこで、父の大君の後を継いで日継ぎの位に就く祝いごとが行われての、大きな宴が催されたのじゃが、その時に、そのまま寝てしもうた。すると、それを狙うて、弟のスミノエノナカツミコが大君の命を奪おうとしての、火を大殿にかけたのじゃ。それでの、大君のそばに仕えておった、倭の漢（あや）の値の祖（おや）アチノアタヒが、酔うた大君を火の中から救い出して、こっそり馬に乗せると、難波から倭へとお連れしたのじゃった。・大君はようやく酒から醒めての、「ここはどこなのか」と問うたのじゃ。それで、アチノアタヒは、「スミノエノナカツミコが火を大殿にかけました。それで、お連れして倭へ逃げる道中でございます」と言うた。すると、大君は歌をうたった。

たぢひのに	ねむと知りせば	多遅比野（たぢひの）で	寝るとわかっていたら
立つごもも	持ちてこましもの	まわりに立てる薦（こも：敷物・むしろ）を	持ってきたのになあ
ねむと知りせば		野に寝るとわかっていたら	

◎そこから逃げて波迹賦坂（はにゆうざか）に到り、西の方、難波の宮を望み見ると、大殿を焼く火はまだ赤々と燃えておった。大君はまた歌うた。

はにふざか	わがたち見れば	波迹賦坂に	登って見ると
かぎろひの	もゆるいへむら	かげろうに似て	燃え盛る家々は
つまがいへのあたり		我が妻の家のあたり	

◎そこからまた東に逃げての、大坂山の登り口に到り付いた時、ひとりのおとめに出逢うたのじゃ。するとおとめは、「兵器（つわもの）を持った者どもが、あふれるほどにこの山を囲み遮っています。遠回りになりますが、当麻に抜けるタギマ道を超えて行かれるのがよいでしょう」というた。

そこで大君は、歌をうとうて喜んだのじゃ。

おほさかに	あふやおとめを	大坂山の入り口で	出逢うたおとめよ
みち問へば	ただにはのらず	道を尋ねると	まっすぐとは言わず
たぎまちいをのる		当麻への道を教えたよ	

◎そこで、当麻を抜けて倭を東に進み、石上の神宮（かんみや）にはいったのじゃ。ここは、大君の兵器の納めた蔵じゃでの。

◎当麻に抜けるタギマ道：河内の国から大和に抜ける峠はいくつかある。大坂山（穴虫峠）の南にある竹内峠を越える道がタギマ道で、当麻寺のそばを抜けることができるが、大坂山の登り口からすると迂回路になる。

◎先日も山の帰り道、奈良方面から峠を越えて大阪に入りたいと走ったが、何を間違えたのかいくつかの峠を越え迷路をさまよった。竹ノ内街道、暗峠、十三峠・いろいろあるねえ。義理のジジババが入っていた施設が麓にあったので、見舞いのついでにいくつか登ったよ。

- ◎自転車から家を出て車の右往左往する場所から芥川の土手にやってきた。「やや やっと自然だ 川の水 草 鳥たち いいなあ」白い鳥の群れが川下に向かってくる、「ええ ユリカモメ そんな まさか」見ていると、一匹が首を伸ばした、シラサギの群れだった、山の峠から朝の出勤かな。
- ◎今日は夕方5時に富田で4人集合して、ミニ忘年会がある。せっかくなので、その前に、ポンポン山に登ろうと計画した。「5時に富田なら 1時前にポンポン山を出発しなくっちゃ」「12時半にポンポン山に着くには9時に摂津峡下の口から歩始めなきゃ」「9時に摂津峡下の口に行くには8時に家をでなきゃ」「30分ぐらいは余裕をもたせない」「朝は6時ころに起きればいいか」と計画したが、目覚めたのは7時だった。
- ◎晴れている、白い雲がふわりふわりの青い空、風は冷たい。原村の墓の傍の登山口まで1時間ちょっとかな。
- ◎調べると3月と9月に、ポンポン山に登っている。9月の時は夏の暑さが残っていて、「だるい しんどい もう体力がなくなってきている」なんてとぼとぼ歩いていた。それに比べ、今日は身体が軽い。
- ◎10:10 登山道を登り始めた。エンヤコラエンヤコラ、鈴をチリチリ鳴らしながら歩いている。鳥の鳴き声がまったくなく、獣の気配もない、イノシシがあちらこちらを掘り返している、小さいケモノの細長いうんち、道の上には枯葉が積もっている、サクサクサクサクである。この道ではひとつこひとり会わなかった。
- ◎11:20 本山寺の参道に合流した。水を飲みサンドイッチを齧り、みかんを食べた。
- ◎不思議な光景を見た。「前に ブルーシートがある 何かな」近づくと、葉っぱの反射が青く見えただけだった。葉っぱが青い、なぜかなと思ったが、上でもそれを見た。葉っぱが空の青を写しているのだった。
- ◎12時だ、30分もすればてっぺんに着く、飯はてっぺんで喰おう。鈴をチリチリ鳴らしながらザックザックの足音、枯葉の積もった地面をたたく音がレコーダーから流れる。空気は冷たい、シャツ3枚で汗ばんでもいるが寒い。陽は照っている樹林帯の中、木洩れ日が地面をまだらに色づける。
- ◎12:30 てっぺんに着きました。樹にぶら下がった温度計は8度だ、青空に白いほわり雲、週日なのに人が多い、飯を喰ってる間に延べ10人ぐらい登ってきた。1時10分前に下りだした、さあ急げ急げ、最近はずっくり歩くようになったが、急げば早く歩けるじゃないのと叱咤、やれ行けそれ行け下りは早い。
- ◎ちょうど1時間で原村に降りる合流点にやって来た、来た道を下るか、神峯山寺の紅葉を見ながら下るか、水とビスケットを齧りながら休憩が終わって、原村への道を選んだ。
- ◎30分ほど下ったところの高架鉄塔の下、大阪湾の海が見える、四国か淡路島が見える、大阪市内のビル群が見える。まだ2時半だが西陽がキラキラ夕方の雰囲気だ。
- ◎最後にえらいめにあった、板に書かれた手描きの案内、こちらからも原村に抜けられると出ている。以前から知っていたが、「よし これを行ってみよう」と下りだした。10分ほど下ったところで印を見失った。「戻るには あの坂は急だったな 向こうに車の音もする、斜面を降りてちょろちょろ流れを行ってみよう」おっとと、こらしよ、「おお トンネル入り口がある これをくぐれば 原村かな」かがまないと歩けない狭い真っ暗なトンネル、ライトを出して進んでいく。「前に出口の明かりが見えないね おかしいね ええい 行けえ」長い時間に感じたがトンネルが右に曲がっている、曲がると前方に明かりが見えた、「おおこれで出られる 原村だ」ところがどっこい、出口に来てびっくり。コンクリートが前に、横に、「あれえ ここは見慣れた風景 この上をいつも歩いているところだ」さてまずどうして地上に出るか、重いザックをおろし、そろり力を入れ壁をつかみ、足を上げ、なんとかトンネルから脱出できた。次の難関とは、ぐるり背の高いフェンスで囲われている、これを越えなければ。扉がある、そこに行ったが南京錠がかかっている。背よりやや高い部分に近づき、ザックを柱に掛け、思い切って足を上げた。てっぺんをまたぐときに、たまたまを打ち付けないようにそろり着地した。ガードレールまでの斜面を草をつかんで舗装道路に降り立った。30分のロスタイムだ。
- ◎約束の5時に5分遅れて、富田に到着した。皆さんとそれじゃお店へ、入ってみると、同級生の奥野君が座っている、お互いなんでこんな所で会うんだ、なんて頭を回転させながら、「よう やあ」だった。
- ◎お酒をいただき、話をして、暗い道を自転車で帰った。

12月7日の午後2時か3時頃、またまた、警官に質問されました。

茨木市のけっこう幅の広い道路の右岸歩道を（川ならこういうのですが・・・）自転車で走っていました。横をパトカーが同じ方向に追い抜いていきました。

パトカーが、20メートルほど先で歩道に乗り上げました。

下校時の小学生が多いのに、むちゃなやつだな、何を追いかけているのだ。

のんびり自転車をこぎながら前を見ていると、二人の警官が出てきました。

「ちょっと」と指さす。オレかいな、またか・・・。

60歳代からこれで5回目です。単車の巡査に3回、パトカーは2回目。

「その自転車は、おたくのですか・」「おなまえは」「自転車はどこで買いました」

小学生たちもたくさん見ているので、笑いながら、自転車を買った店やら名前やら、を話していたら・・・。

「失礼しました、お話ししたら、まともな方とお見受けします・・・」

「がはは、まともな方ですぞ」

皆さんどう思う、オレ、そんなに怪しいですか、これで、5回目ですぞ。

「わろてなしやあない・・・」です。

◎オレのぼやきを受けて、友人の、元検事のFさんが送ってくれた。

たびたび職務質問を受けて、大変でしたね。今回の職務質問の理由は、

- ① 小学生の下校時の時間帯であったこと
  - ② 元気そうな初老の男が一人で自転車に乗っていたこと
  - ③ 風貌が普通ではなかったこと
  - ④ 過去に当該地域で痴漢事案が発生していること
  - ⑤ パトカーの警察官は緊急の用務を帯びていなかったこと、
- などが挙げられます。

現在、警察では何か事件が起こると、事前に予防できなかったのかと警察官の不作為が問題とされます。その意味では、

⑥職務熱心な警察官だったことも理由に挙げられます。

いずれにしろ、岡村氏はそれだけ元気にみられたのですから、前向きに捉えてはいかがですか。よぼよぼの老人には職務質問はしませんよ。今回の件は、是非、来年5月に開かれる同窓会で披露してください。

元気の出る話のネタになります。では、お達者で。ボヤキは元気の出る源です。

◎友人の頼もしい女性：MYさん

もしかしたら若者好みのスポーツタイプの高級自転車に乗っておられたのでは？私はママチャリ。これなら大丈夫みたいです。岡村さんにはママチャリよりはスポーツ自転車は似合うと理解していますが、年齢偏見のあるお巡りさんには違和感だったのかなあ？

◎外国勤務の多かった友人Yさん

見かけは、穏やかな紳士です、職務質問を受ける風貌ではありません。乗っている自転車が上等過ぎたのかな？小生は過去に3台の自転車の盗難に遭っています、その辺りで自転車の盗難が多いのでは。小生は昔昔ウオタールーの駅で別室で取り調べを受けたことがあります、金と薬の運び屋と疑われたようです。気にしない、しかし5回は多いな。

◎大学教授のKさん

徘徊老人と間違われなっただけ、立派です。

- ◎登山口から登り始めた。「天気もうひとつかな」と思っていたが 2.3 日前からお陽さまマークがで始め、今空を見上げると青空が広がりほわり白い雲がちょっとあるだけ、願ってもない好天、空気は冷たいがシャツ 3 枚でエンヤコラ登っている。少し登っただけだけれど、横の樹々の隙間から琵琶湖がまる見え、すぐそこに見える、朝陽が照り返って湖面がキラキラだ。
- ◎めずらしいことに電車が 10 分強遅れている。アナウンスでは、線路上に障害物か人の立往生を感知して電車が止まったとか、事故でなくてよかったと安心している心優しきオレを見ている。車で行こうか、電車にしようか、迷ったが電車にした。湖西線の新快速敦賀行きに乗ると、家から出て 1 時間半で北小松駅に着く。車だと、皆さんをひらって茨木 IC から高速道路で走っても 2 時間をゆうに超える。
- ◎新快速列車は高槻駅しか止まらない、なので、茨木から高槻まで普通電車に乗り、階段を上がって向こうのホームに渡って、新快速に乗る。この列車は、前 4 両が敦賀行き、後ろの何両かが東海道線だ。間違えて乗ると湖東の方に行ってしまう。京都で座れるかと思っただけ、けっこう混雑気味で、北小松までの 1 時間立つことになった。スピードの出ている電車の車窓は、左側の山が、右側の琵琶湖が飛んでいく。
- ◎10:25 涼峠。今日は、相澤、前川、三宅各様と、オレの 4 名で登っている。釈迦岳まで行きそのまま来た道を帰る計画、ここは長くハードなコース、途中でリタイアされるかもと、ピストンコースを選んだ。涼峠の看板に歌が書いてある。花一や畑の木場という言葉、百年ほど前に麓の方々が山に登って薪を集めたのか、荷を背負って向こうの村に行ったのか、山仕事の袖人が歌っていたのか、そんな人たちの動きが感じられる。
- ◎小松柴出し歌：涼し向きあげ 花一超えて ドンド下れば 畑の木場・・・
- ◎“山仲間”という名、スマホのラインで今回の山計画をお知らせしたが、小さい画面、複雑な説明がなかなか通じにくい。何度か言いあううちに、それではプチ忘年会を茨木でしようかと、何度かのやり取りで決まった。
- ◎11:10 ヤケ山。このコースは 50 歳代から何度も登っている、オレにとって最もお気に入りのコースだ。今日と同じ、9 時前に北小松駅に着く電車に乗って来て、12 時頃には釈迦岳で弁当を喰っていた。今はがんばっても 1 時になってします。雪の季節は、寒さと斜面の雪に阻まれて途中で引き返したことが何度もあった。
- ◎今日は穏やかな日差し、風もなく、暑くも寒くもない、エンヤコラ、コラシヨ、のぼれ登れた。
- ◎樹々を見渡すと葉っぱがない、もう枯れて散ってしまった。小さい枝があっち向きこっち向き、枝先には蕾や芽が付いている、枝先全部についている。芽になって、蕾になって、これからの冬の季節、風雪に耐え樹氷や霧氷の真っ白の世界、それでも樹々は春を待つ、そういうことだねえ。
- ◎12:30 釈迦の手前、見晴らしのいい所、琵琶湖が眼下に見える崖の上、穏やかな陽気、芝の上、「ここで飯にしましょうか」皆さん弁当を広げた。オレの手作り弁当はいつもと変わらないもの、美味しいと思いながら喰った。リンゴが出た、柿が出た、レモンの砂糖漬け、枝豆まであった。たくさんいただいた。皆さんはここでゆっくりして、折り返して帰るといふ。「それじゃわがままだけれど ひとりで釈迦まで行ってくる 1 時間もかからない」荷を置いて腹のポシエット、カメラと水だけ持って歩いた。
- ◎1:30 釈迦岳にやってきた、気持ちがいい、葉は全部散ってまわりが見渡せる。この穏やかな暖かい空気も、明日にも明後日にも大陸の冷気が舞い込んで、風が吹き小雪が舞い散り、ヤッケのフードを被らないと立ってられない、というふうになっていくのかな。てっぺんはだれもいない。先ほど後ろから話声が聞こえる、振り返ったら、10 人ぐらいの団体が登ってきた。50 代ぐらいの人たち、男の方が一人いた。タケオ山のあたりで飯を喰ってそのまま下山したようだ。その方々以外はどなたとも会わなかった。
- ◎2:10 タケオ山まで下って来た。タケオ山の上からは琵琶湖大橋方面が見えていたが、タケオ山の下からは湖北方面、伊吹見え、雪で白い白山が見える。
- ◎5 時前に登山口まで下って来た。「暗くなる前でよかった」せんべいを喰いお茶を飲んだ。北小松駅で、1 時間に一本の電車が 15 分ぐらいでやって来た。姫路行の新快速だった。高槻で乗り換えるときに、オレの方向感覚が吹っ飛んでしまった、どこがなにやら状態だった。茨木に着きプチ忘年会を楽しんだ。

◎健康の話：ホームページにまだ暑いころの“9月30日”記で、文章を載せている。「先日 茨木市から 保健師長のお姉さんが訪ねて来てくれた 血圧138~102 脂質LDL:154 血管障害の開始ですよ 危険区域です」と注意を受けた。「よし ちょい痩せるぞ」食を減らしている。

毎年、市の健康診断を誕生日前に受けるようにしている。脂質の数字が高いことは60歳代からの献血で知っていた。血圧も10年ぐらい前から上がりだした。

いやなのは大腸内視鏡をしなさいと言われること。健診で毎回検便をするが、20年ぐらい前は、あびるように毎日酒を飲んでいたせいだと思うが、一度はポリープ手術、もう一度は念のためだった。時間が一日かかる、一万円ぐらいの費用がかかる、下手な医者にかかるとうるさい。毎回結果を聞きに行く時は、びくびくしているが、検便は、もう10年ぐらいひっかかっている。

保健師長のお姉さんに言われ、まず食を減らした。それまでは腹が減ったら何かを食べていた。それでもさほどは肥えなかったが、一年前ぐらいから、「いささか しんどい」と思うようになってきた。「これは 年齢のせいかも・・・」と思っていた。それまで先頭を切って登っていた山が、先頭が切れないことが出てきた。夏には73キログラムの体重が、半年経った今は66キログラムまで減った。健診の血液検査数字、範囲外の個所に印が付いている、印は相変わらず残っているが数字がいささか少なくなっている。

それとパンのこと。オレはパンが大好きで、もう何年もパン焼き器でほとんど毎日焼いている。「パンとは 塩を たくさん 入れるものだな」このことは知っていたが、塩を入れないと上手く焼けない、美味くないと思っていた。「さてよ 無塩パンが あっても いいんじゃないのか」と早速検索した。「無塩パンは ずっしり固いが 小麦の味がして 美味しいですよ」と書かれていた。昨日初めて無塩パンを作ったが、美味しい、しかも砂糖も入れないのに甘い。健康オタクも困りものだが、80歳代も山に登るためには、グワンばるぞ。

◎デザイナーになった気分の話：10日ほど前、友人の会社の社長から、「創立〇〇周年記念のロゴを造ってくれ」「そのロゴを入れて 名刺・封筒・幟 造りたい」と依頼を受けた。社員が造ったロゴが添付されていた。「おお おお これは上手い これでもいいんじゃないか」と思うぐらいに上手く造られていた。

在宅のわが娘くんにも相談した。「造ってみる」ということで、社員君の造ったもの、オレの造ったもの、娘の造ったもの、これらをひとつの紙に並べ、大きさを同じにして提出した。

娘の造ったものがいいと決まった。そのあと、娘の造ったものを基に、名刺、封筒、幟を配置していった。配置と簡単に言うけれど、大きさ、色合い、周りとのバランス、これらは難しい、時間ばかりがかかる、うんうん唸ってなんとかできあがったら、またまた注文、またまたうんうん、仕事とはこういうもんだね。

デザインという仕事は、絵を描くこととは大違い、「オレの絵は これじゃ」とのさばっているオレには、クライアント氏の顔色を窺っての進行はなかなか骨が折れる。でも楽しかった。

◎歯医者の話：健康の話の続きでもあるのだが、最近歯の検診に近所に通っている。以前、山仲間の方と酒を飲んでいて、彼の連れの歯医者の女性が、「歯が抜けてる 口開けてみて」爪楊枝で歯をおさえながら調べ、「今度うちに来る？」とお誘いを受けた。渡りに船と約束したが、「やはり 近所で 診て もらった方がいい」と言ってきた。あれれ、断られたかとはがっかりしていたが、今となっては彼女の言う通りだったなと思っている。歯は3か月に一度ぐらいの割合で検診を受けたほうがいいらしい、まして、オレのように多少悪い部分を抱かえた者にとっては積極的に歯医者にかかったほうがいいらしい。「いいらしい」と連呼しているが、このことは知らなかった、ずっと、ほったらかしにしてきていた。

娘曰く、「歯はね 悪くなる前に 健診に通う これが極意」とおぬかし。たしかに、2か月、3か月おきに掃除をしていただくと、なんだか、歯がしっかりとってきた感じ、白いきれいな歯が並んでいる感じ、気持ちがいい、気が晴れる、若々しくなる、嬉しい限りである。もっと若いころに気づくべきだった。

三浦祐之著<口語訳：古事記>

◎オホサザキ（仁徳）が亡くなり、息子の一人、イザホワケ（17代履中）が大君になった。弟のスミノエノナカツミコが大君の命を奪おうとし、酔った兄が寝ている宮に火を放った。イザホワケは倭に逃れようと急いだ。

◎地図を調べると、宮のある高津から、武器庫のある石上までは、直線で30キロ、東方やや南に振っている。花園ラグビー場から生駒山を越え、天理を超えたら石上だ。古事記では、南に大きく膨らんで石上に向かっている。竹ノ内街道の近所に“近つ飛鳥博物館”がある。このあたりまで大きく南に膨らんで、そこから石上に向かったようだ。“近つ飛鳥”“遠つ飛鳥”とは、ケタイな言葉だと思っていたが、古事記に書かれた場所だったとは知らなかった。

◎イザホワケは石上の神宮に入った。そこに、大君と母を同じうする、弟のミヅハワケが、大君に会いたいというてやって来た。大君を殺そうとしたスミノエも母は同じなので、ミヅハワケはその二人の御子の弟じゃった。大君は、直に会おうともせず・・

「われは、そなたも、スミノエと同じ心を持っているのではないかと疑っている」

取次のものに言わせると、ミヅハワケは答えて。

「わたしは、邪まな心など持っておりません。兄のスミノエと心を通わせているわけではありません」

「それならば、今すぐ難波に下り、スミノエを殺してから戻って来ればよかろう。その時、あらためてそなたとお会いいたそう」

◎それでミヅハワケはすぐに難波に下り、スミノエの側仕えをしておった隼人で、名はソバカリという男をだましての、

「もし、お前がわたしの言うことを聞いてくれたならば、わたしが大君になった暁には、ふたりで天の下をおさめようではないか。どうだ、悪い取引ではなかろうが」

ミヅハワケは、数々の品物をソバカリに渡し、スミノエの殺戮を指示した。そこでソバカリは、おのれの御子が厠に入っておるところを密かに近づいての、長い矛でスミノエを刺し殺してしまった。

◎さて、ミヅハワケは、ソバカリを連れて倭へと上がって行ったのじゃが、大坂山の登り口に到って考えた。

「ソバカリという男は、我がために大きな功を立てたけれども、おのれがお仕えしていた君を殺したのは、義（ことわり）にもとる振る舞いだ。しかしながら、その功に報いなければ、我に信がないということになってしまう。しかしその信を行ってソバカリを報いたならば、奴の心根から見て次にはいつおのれの命が狙われるかもしれない。そこで、その功に報いた上で、ソバカリの命を奪ってしまおう」

◎そこで、ミヅハワケは、ソバカリに親しく言葉をかけたのじゃ。

「今日はここに留まり、まず、そなたに大臣（おおおみ）の位を授け、そのうえで、明日、倭に上ることにしたそう」

すぐさま、隼人ソバカリに大臣の位を授け、お伴の者たちすべてを、大臣の前に額づかせたのじゃ。それを見たソバカリは心から喜んだ。

「めでたい今日は、大臣と同じ盃で契りの酒を飲むことにいたそう」

ミヅハワケはソバカリに向かってさういうと、顔をすっぽり隠してしまうほどの大きな椀（まり）を持ってこさせての、その椀になみなみと酒を注いだのじゃ。そして、御子がまず椀に口をつけて半ばほど飲むと、その椀をソバカリに渡した。ソバカリが口をつけて残りの酒を飲みほそうとして、ぐっと椀を傾けたので、顔をすっかり覆ってしもうた。そこをねらって、ミヅハワケは剣でソバカリの首を一太刀に切り落としてしもうた。

## 三浦祐之著&lt;口語訳：古事記&gt;

◎前回の話：「お前が仕えている主人を 殺したら オレが王になった暁には お前を取り立ててやる どうだ やってくれるか」それを聞いた男が、自分の仕えている主人が厠に入っている時に、密かに近づき、槍でもって、主人を突き殺してしまった。

このての話は TV ドラマや映画でよく聞く話だ。渦巻く欲望、嫉妬や猜疑心、小賢しい策略、恐怖で縮こまってしまうのか、起死回生の一手を打つのか、様々な舞台があり、展開があり、だれかが勝ち残る。結局勝ち残ったものの勝ち、最後の笑うのはオレだ、というような歴史の世界。

◎小心なオレは、法に触れるような悪いことはできないが、ちょっとだまして、嘘をついて、ごまかして、そういう生きざまがヒトの世界なのか。ジジイになって悟りきった今、そういう俗っぽい話は笑って聞くしかないが、人が若々しく力にみなぎって、おのれの欲望を遂げるためには、「なにをどうしよう」「どこをどうさわろう」日々暗躍する悪い頭のささやかな思考。若い方々、せいぜい頑張って、のさばって下さい。

◎お前の主人を殺せ、と言いながら、本当に殺してしまっていて、しっぽを振ってにじり寄ってくる男。「あの男はオレのために 主人を殺したのだと わかってはいるが・・・」「でも いつまた オレを敵に回して 殺しに来るかもわからん・・・」そう考え、酒を飲まして殺してしまう、なんともはや大陸的なおおらかさかな。ただ面白いのは、目の前で剣を抜いて切り殺すには義理が立たないのか、頭がすっぽり入ってしまうような大きな器で酒を飲ませ、顔も目も見えないところで首をはねるなら、義理が立つ、笑っちゃうね。

◎先生曰く、古事記も後半、古墳時代の実在したかもしれない人物の時代、大陸風儒教的な考え方がちらほら入ってきているという。人間はこうでないといけない、人生は、生き方は、こういうことを守らなければいけない、こういうことがちらほら出てくるという。

◎ミヅハワケは、ソバカリの首を一太刀で斬り落としてしもうた。そして、イザホワケの大君に会うために、明日に、ミヅハワケは倭へ上っていった。それで、そこを名付けて近飛鳥（ちかつあすか）と言うておるのじゃ。倭に入ると、ミヅハワケは、

「今日はここに留まり、穢れた身を禊したのちに、明日、大君の座す（います）神宮（かんみや）に参ろう」というた。そこで、そこを名付けて遠飛鳥（とおつあすか）と言うておるのじゃ。

◎近飛鳥（ちかつあすか）と遠飛鳥（とおつあすか）という言葉が、古事記から来ていたとは大発見なり。

◎さて、次の日、石上の神宮に参ると、取次のものを通して、

「仰せいただいた、政は全て片づけることができました。それで、お側に侍り参っております」

大君に申し上げたのじゃ。すると大君は、すぐに、ミヅハワケを宮ノ内に入れての、兄と弟で親しく語りおったのじゃった。

◎そして大君は、火の中からおのれの命を救ってくれたアチノアタヒの功を誉めて、蔵の司に取り立てるとともに、田所を与えてねぎろうたのじゃった。

◎このイザホワケの大君の御年は、六十あまり四歳（むそとせあまりよとせ）での、壬申（みずのえさる）の年の正月の三日に亡くなったと伝えておるの。その御陵（みはか）は、毛受（もず）にあるのじゃ。

◎イザホワケの大君を継いで大君になったのは、ソバカリにスミノエノナカツミコを殺させたミヅハワケじゃった。

◎この時代の天皇在位期間は、平均 10 年ぐらいの計算になる。



◎高見山に霧氷を見に行こうと計画した。相澤・前川・三宅・吉中・岡村の5名。

◎10:30 たかすみ温泉駐車場から出発した。7時に茨木を出発、針インターに、8時半集合、9時半にたかすみ温泉、10時前には登山開始の予定だったが、予定よりだいぶ遅れてしまった。この時期、一年で一番早く日暮れがやってくる季節、4時には下山しないと薄暗い中の山道は危険だ。「大きな寒波が 来ている 近畿地方も雪が降る」しきりに天気予報の声が聞こえる。2.3年前の冬、同じ地域の三嶺山に登るのに、御杖村の方に車を走らせたが、途中から道路上の雪が凍結していた。その時は、雪用タイヤの車で行ったが、今日はオレの車、四輪駆動とはいえタイヤは普通タイヤだ。「行けるところまで 行ってしまおう チェーンをつけての走行はスピードが出ない」高見山がある高見トンネルの手前で、「さすがにこれは チェーンが要るぞ」と止まった。「ええと あっち こっち・・・」「違うな やり直し・・・」1年前の予行演習でうまく簡単に装着できたが、雪の道路上、なかなか填まらず30,40分時間がかかってしまった。

◎今年の2月にも同じところを歩いている、その時よりも雪が多い。たかすみ温泉付近の道路上も普通タイヤでは滑らかなというぐらいの雪、橋を渡って登山道に入ると、10,20センチの積雪量、「後半ばてないために 最初の一本は30分にしよう」えっさほっさと上っていく。シャツ2枚にセーター、その上に防寒チョッキ、防寒帽子もかぶっている。防寒上着はザックの中だ。風はヒヤリ冷たいが、頭の中や背中汗が出てくる。ここまでは針葉樹の植林地帯、ちよろちよろの流れのそばを登っていく。大きな杉の木（高見杉）がある避難小屋までコースタイムは1時間、途中一回休憩して避難小屋までやって来た。避難小屋とはいえ扉はない。いおりがあつて火を燃やせるが、一晚過ごすとなると寒いだらうね。てっぺんにも小屋があるが、そこも扉があつたかなかつたか、とにかく冬の今の季節、小屋に籠っても一晚生きていられるかという寒さだ。

◎尾根道に登ってきた、もう一本ぐらいでてっぺんに着くだろう。まだ防寒具を着ずに歩いている、風が冷たい、シャツの中に冷たい風が入ってくるが身体も熱いのでちょうどいい、えんやこらだ。強い風が吹く、小雪が舞う、ハナミズが垂れる、手の指が冷たい。まわりの景色はキレイ、真っ白けの雪、ピッケルがずぼり突き刺さる積雪、樹々の葉はモコリもっこり雪で膨らみ垂れさがるモンスター状態、太い幹は雪をかぶり別の生き物のようだ。風の強いところの細い幹には、氷のナイフが上から下までずらりと並び風上に向かって刃を尖らせている、こんなところで転びデモすりゃブスリ突き刺さるかも。それでもこの刃の並んだ姿は素晴らしい、写真を撮りたいなと思うが、手袋をはずしてカメラを出す勇気がない、とは情けない寒がりよう。ひたすらにザクザク登る、空を見上げると吹雪の空、薄暗く白い。

◎1:30 山頂避難小屋に到着。5人の方が食事中、とはいえ腰を下ろしての弁当ではなく立ったままで、おにぎりやパンとテルモスの暖かい飲み物。オレも弁当を広げたが座るには寒すぎる、立ったままで箸を取り、冷たいごはんを、さぞ美味かろうおかずを、ぼそりぼそりと口に入れ、テルモスのさめた茶を飲んだ。さっさと飯をすませて動かないと寒いさむい。小屋にあった温度計は零下5度だった。2時には下山開始をしないと暗くなってしまう、今は一年で日暮れが一番早く来る季節、さあ急げ急げとササッと飯をすませ、まわりの景色をカメラに収めた。

◎「樹氷か 霧氷かを見に行きたい 青空の中に白い氷が見てみたい」ともくろんでやってきた、楽しみの山だったが、モンスター状態の雪の付き方、これはこれですごい、素晴らしい。小屋の中で6本爪のアイゼンをつけた。「あれれ どうするんだっけ・・・」久しぶりのアイゼンに戸惑いながらもなんとか装着、2時に小屋を後にした。

◎半分以上くだったところに、お陽さんが顔を出した青空が見えてきた。「えええ くそお だね いやいや上はまだまだ 荒れた状態だよ」なんて負け惜しみをいいつつどんどん下った。

◎4時過ぎ、まだもうちょっとかかりそうかなという霧囲いの山の中、暗くなって足元がおぼつかない、「これはやばいぞ 早く下りないと・・・」なんと目の前に屋根が現れた。「ついた」4時15分に舗装道路に出た、山から出ると、夕方の明るさが残っている。家に帰り着いたのは8時半ごろだった。

- ◎今年ももう終わり、冬至が過ぎ、クリスマスが過ぎ、あと一日で今年が終わる。いやあ、月日の経つのが早い、いやになるほど早い、まして、このオレが76歳になってしまったとは、このペースで行くと80歳の大ジジイなんて目の前じゃないのかね。
- ◎パソコンを眺めていて、「知能指数・・・」という文字のボタンを何の気なしに押してしまった。なんと問題がすぐに始まった。「ええと これ」「はは～ん これだ」最初は仕様もないねとやり始めたが、だんだん夢中になり、20門か30門を解き終わった。「あの部分は失敗した」「これは ひらめきと 感性だね」なんて思いながら終わった。終わり、こちらのアドレスなどを入れた。「採点点数を 知りたければ 千円 支払いなさい」と来た。「なんだ 有料か やだよ」そのままに切った。翌日、「あなたの数字は 抜群に高い 半値にします」それが2度来て終わった。オレは知能指数検査を小学校時代に、学校で受けたことがある、その時の数字が、「144」だったと記憶している。今回もそんな数字が出たのかな。ま、しかしだ、この歳になって、「知能指数が高いんだ」と大声で言ったところで、仕方がないよね。
- ◎「最近 痩せてきた 夏から比べると 5キロ減ったよ」と言っている。9月末に茨木市の保健師のお姉さんが訪ねてきて、「数字が悪いですよ 要注意ですよ 血圧・脂質・・・」といわれ、「よし 5キロ減らすぞ」と飯の量を減らした。1年ほど前から、山に行って、「しんどいな」と思うようになっていた。まさかオレが歩けなくなるとは、と恐れていたが、飯を減らしたとたんに、いたく元気になった、体調が元に戻った、山もどんどん登れるようになってきたという嬉しい話だ。これは内緒だけれど、オムロンの体重計が、「46歳」だとおぬかしである。
- ◎コロナ禍が始まって、もう3年？え2年？忘れてしまうねえ。コロナ禍が始まった当初の1.2か月は、「えらいことだ でも まもなく 終わるだろう」と気楽に考えていた。5年ほどかかるという学者もいたが、そんなに続くわけがない、もうすぐに終わるよと楽観的に考えていた。外出できない、人と話せない、電車に乗れない、えええ、それは本当か、そんな世界があるのか、しばらく続くのか、そんな馬鹿な・・・。そうして1年経ち2年経ちこの生活に慣れてしまうと、前の生活を忘れてしまった。残念なことは、コロナ禍で他の方々との交渉、会話、接触の機会が薄れ、人間関係が希薄になり、「〇〇が倒れた」「〇〇が亡くなった」という話を聞くにつれ、だんだんオレのまわりの知り合いたちがいなくなっていくねと痛感している。
- ◎安威川の土手からずっと見てきた工事、もう1年半ぐらいになるのかな、解体に半年、去年の今頃から地中を掘りだし、柱がによきによき立ってきた。でっかい建物だ、少し離れた所で建ちあがった建物とどちらが大きいかな、なんて思いながら横目に見やって走っていた。もうあと2.3か月で完成かなというところまできている。「え 看板が同じじゃないの・・・」少し離れた所の建物と同じ会社の所有物だった、「そらあ 形も 似るわなあ・・・」とはいえちょっと違う、あの凸凹は、あの階段は、1階と2階は柱だけで仕切りがない、部屋がない、なんて工事をじろじろ見ながら走っている。
- ◎今日は安威川の水が少ない、真ん中のあたりを静かに流れているだけ、ひよっとするとあのあたりなら歩いて渡れるんじゃないかな、膝の下ぐらいが濡れるぐらいじゃないかな、ただ、ぼそぼそと泥に足を取られ膝ぐらいいまで潜ってしまうかもしれない、この寒いのに川に入って立ち往生はしたくないね、なんて独り言、行く気もないのにねえ。岸の浅いところやら、中洲には葦やススキがモクモク立っている。その穂先が綿毛になって、白いモフモフが風に揺れている。今日は曇りの天気予報だったが、朝からお陽さんキラキラ、オレのまわりを照らし続けてくれた。ススキのモフモフが光を受けてキラリ光る、川の水もキラリ光る。